

七堂伽藍跡第 1 次確認調査地点の再確認

大村浩司*

1 はじめに

茅ヶ崎市下寺尾に所在する七堂伽藍跡は、現在下寺尾官衙遺跡群を構成する遺跡として国の史跡に指定されているが、考古学的な調査が最初に行われたのは 1978(昭和 53)年で、2018(平成 30)年はちょうど調査から 40 年を迎えることになる。七堂伽藍跡における確認調査は、その後 2000(平成 12)年から茅ヶ崎市教育委員会によって引き継がれ今年で第 17 次調査を数える。そこで最初の確認調査から 40 年という節目であることから、あらためて第 1 次確認調査を振り返り、今後の七堂伽藍跡における調査研究および保存活用を考えるきっかけとしたい。なお第 1 次確認調査については、すでに岡本孝之氏や市民が中心となり活動した下寺尾寺院跡研究会によって作成された『下寺尾寺院跡の研究』にて詳細に検討されている(註 1)。小稿もその成果に多くを依拠するものだが、前述した茅ヶ崎市教育委員会によるその後の調査によって、数ヶ所で第 1 次確認調査の調査地点およびその周辺の調査をする機会を得てお

り、ここでは主にその成果を踏まえながら第 1 次確認調査を振り返ってみることとする。

2 第 1 次確認調査の概要

七堂伽藍跡の発掘調査は考古学者の岡本勇先生によって行われたが、そのきっかけは茅ヶ崎市史編纂事業にともなうもので、岡本先生は調査をおこなう意義について「古瓦や礎石を出す下寺尾遺跡は(註 2)、はたしていつの時代のものなのか。こうした問題を解くために、私たちは発掘調査の必要をみとめたのである。」と報告で述べられている(註 3)。なお調査は 61 年前における七堂伽藍跡碑の建碑から 21 年が経ってからであった。

現地調査は 1978(昭和 53)年 7 月 18 日(火)から 24 日(月)までの 7 日間で行われた(註 4)。調査には大学生、市民、岡本先生の知人、市役所職員などによって実施された(写真 1)。期間中には県立茅ヶ崎北陵高校の生徒も参加している。調査は 14 ヶ所のテストピットと 3 本のトレンチを設定して行われ、その面



写真 1 40 年前に実施された第 1 次確認調査風景

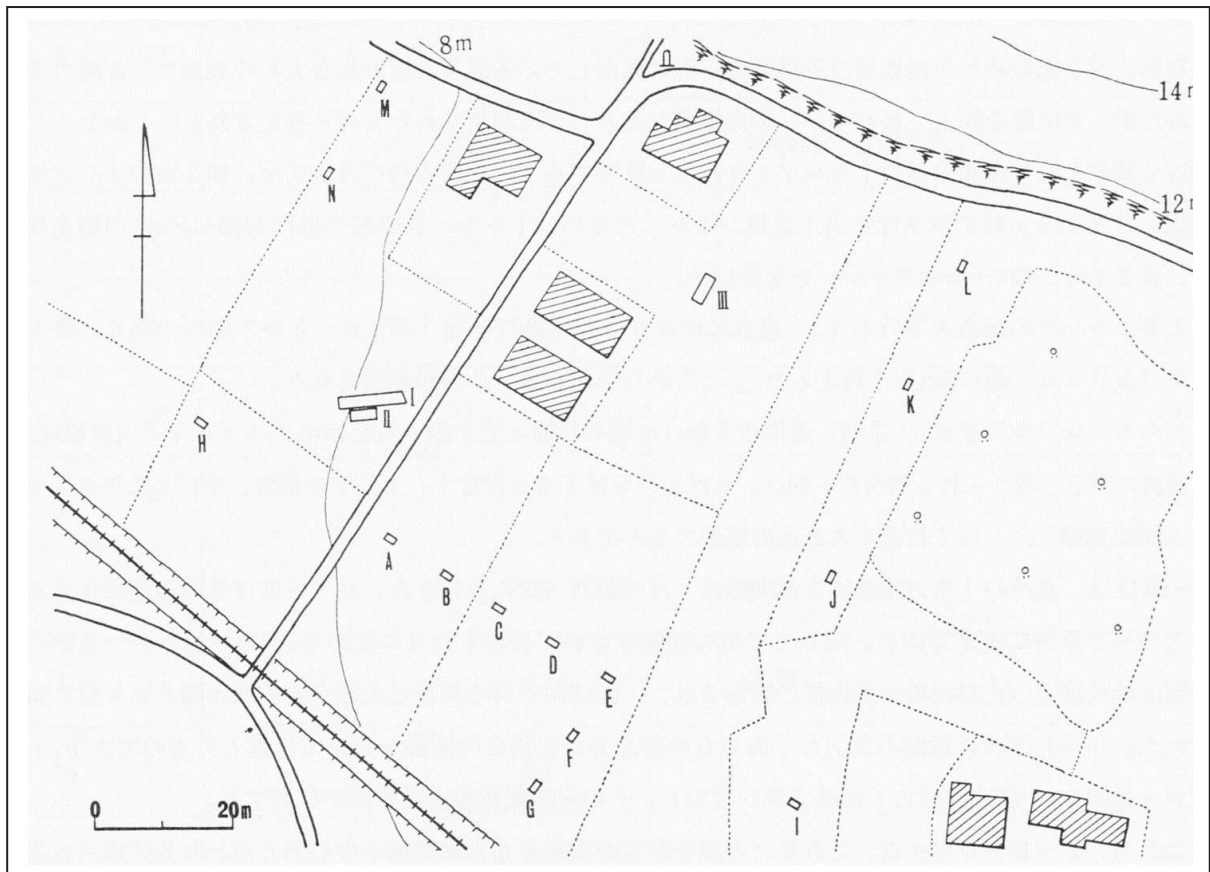


図1 第1次確認調査の調査地点（1978年）

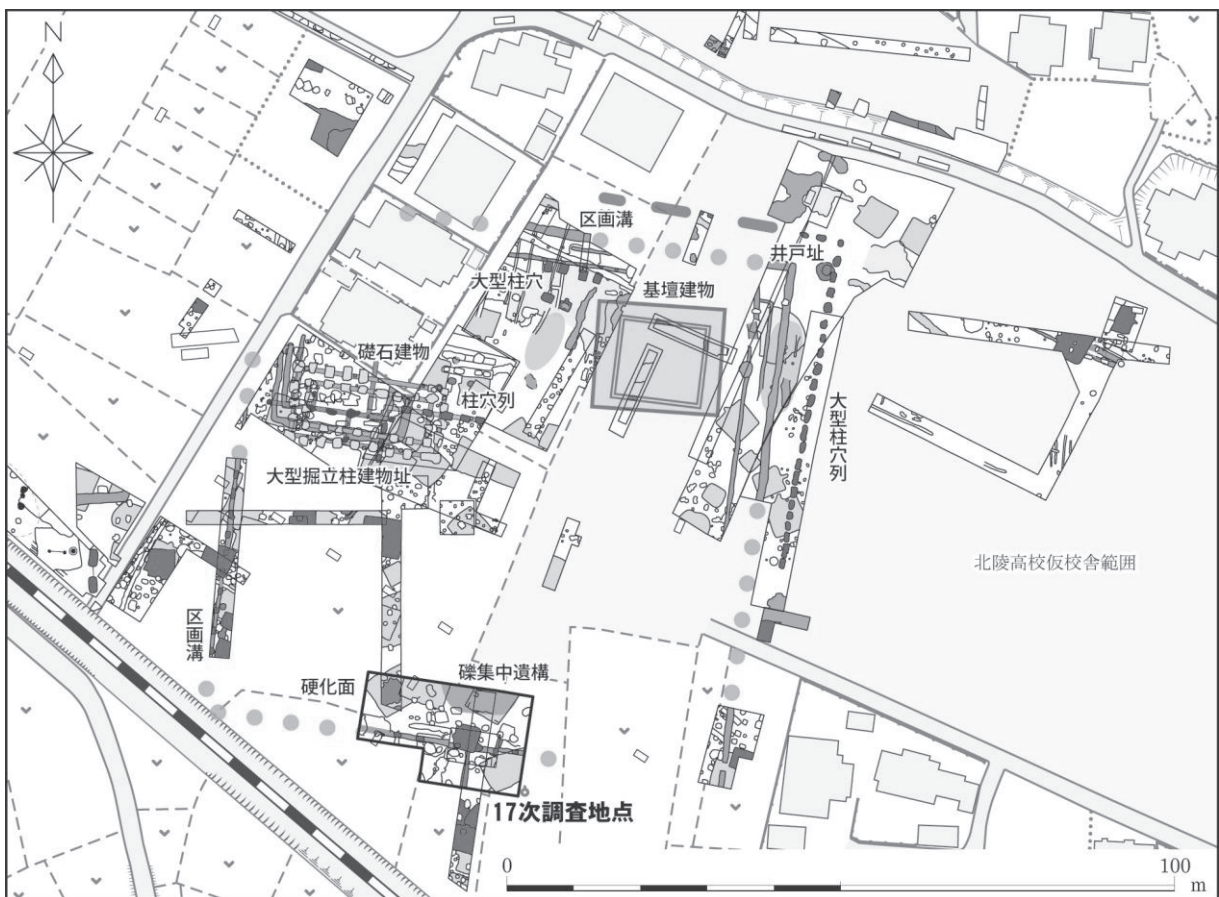


図2 第17次確認調査までの調査地点と遺構配置概念図（2018年）

積は 61.5 m³であった(図 1)。

調査の結果については岡本先生によって『茅ヶ崎市研究 3』で「七堂伽藍跡を掘る」と題して報告されており、発掘調査の成果について以下のようにまとめられている。

「1、礎石と瓦の出土、ならびに多量の灯明皿の発見からみて、この遺跡一寺尾遺跡は、寺院址であったことが確実と思われる。

2、その寺院の年代は、出土遺物、とりわけ土師器の形式から推して、平安時代中頃以降と判定される。

3、Ⅲトレンチ発見の溝は最初に掘られてのち、やや埋まってから再度使用されていた。しかも、その際には不要の瓦が溝底に敷かれていた。この瓦は、古い建造物に使われたものが廃物利用されたものである。この事実は、寺院の存続期間に若干の年代的な幅のあったことを考えさせるものである。

4、寺域の造成にあたっては、台地際に発達していたと推定される湿地を埋立てた可能性がある。

5、瓦の出土は一テストピットでみるかぎり一東西 100 メートル以上南北 90 メートル以上の範囲におよんでいる。瓦がほとんど移動しないという前提にたてば、寺域はかなり広大なものであったと想定せねばならない。

6、寺院の造営される以前、つまり縄文時代・弥生時代・古墳時代にすでにこの砂丘上で人びとの生活がいとなまれた。弥生時代ないし古墳時代には住居も存在したらしい。」

こうした結果については、その後 2000(平成 12)年から開始された茅ヶ崎市教育委員会の確認調査に反映され、七堂伽藍跡の様相を明らかにしてきている(図 2)。以下では岡本先生が調査された第 1 次確認調査地点で、その後教育委員会の調査において当時の調査地点を確認することができた部分について岡本先生の報告とともに再確認してみる。

3 再確認地点の状況

2000(平成 12)年から始まった調査で第 1 次確認調査の調査地点を確認できたのは、17 地点中 8 ヶ所である。

(1) 伽藍域を区画する溝を確認

第 1 次確認調査でⅢトレンチとされた地点で、報告では「トレンチ間の南よりの部分から、東西方向に走る溝が発見された。(中略)溝の下半は、やわらかい黒褐色土で凹レンズ状(断面でみると)に埋まっているが、その面に多数の瓦が敷いた様な状態で発見された。(後略)」とされている。この地点については第 13 次確認調査でⅢトレンチ全体を確認することができ、岡本先生が発見された溝も再確認することができた。第 1 次確認調査の写真で瓦が出土している状況が記録されているが(写真 2)、第 13 次確認調査で溝が東西に延びていることを確認し、西側延長部分で同様に瓦がまとまって出土していることも明らかにすることができた(写真 3)。この溝については、その後の調査によって全体の位置関係などから伽藍域を区画する遺構の北側一部に該当することがわかり、築地塀を想定している改修期の遺構であったことが明らかになった(図 2)。第 1 次確認調査のⅢトレンチは伽藍区域を区画する遺構を確認していたということになる。



写真 2 第 1 次確認調査Ⅲトレンチ瓦出土状況



写真 3 第 13 次調査で確認された溝
(手前がⅢトレンチ)

(2) 竪穴住居址を確認

第1次確認調査ではテストピットF区とされた地点で、第17次確認調査でテストピットの全容を再確認した。このF区について岡本先生は「F区の砂層面は、焼土と灰混じりの硬い面を形成しており、おそらく住居址の床面とみとめられる。」と竪穴住居址の存在を想定されている。第17次確認調査では、F区を含む周辺部分を調査することができ、古墳時代後期の竪穴住居址の存在を確認することができた(写真4)。竪穴住居跡は一边約6mの規模を有しており、40年前の調査は竪穴住居址の中を調査したことになる。

ここで注目したいのは、第1次確認調査において岡本先生は、確認調査という性格を踏まえ、検出された焼土や炭化物をそのままの状態に保存し埋め戻されていることで、将来の調査を意識して調査を進められていたことを感じる。

(3) 大型土坑を確認

第17次確認調査では、第1次確認調査のテストピットG区の一部も確認することができた(写真5)。G区に関する記述は「(前略) 基盤の砂層は南にむけて急激に上昇し、G区の南端では地表下60センチで細砂層となる。」と土層堆積状況についての説明はされているが、遺構等についての記述は見あたらない。第17次確認調査で明らかになった状況からテストピットの北側の一部しか大型土坑は該当しておらず(写真6)、おそらく遺構としての判断は控えた可能性がある。

(4) 瓦集中遺構を確認

第1次確認調査でテストピットL区とされた地点で、報告では「L区でみられた瓦の堆積した硬い面は、あきらかに遺構であるが(後略)」と示されている。本地点については第3次調査において再確認している。第1次確認調査の写真では多量の瓦が出土している状況がみられるが(写真7)、調査地点周辺の調査から同様に多量の瓦がまとまって検出された。瓦が見つかった範囲は不整形な形を呈しており、長軸約8m 短軸5mを測る(写真8)。この遺構は建物に関連する遺構と認識しており、第1次確認調査はこの瓦集中遺構の一部を明らかにしたことになる。



写真4 第17次調査の竪穴住居址（中央右側がF区）



写真5 第17次調査で確認されたG区（中央右下）



写真6 第17次確認調査の大型土坑（中央右上がG区）



写真7 第1次確認調査におけるL区での瓦出土状況



写真8 第3次確認調査で確認された瓦集中遺構（中央右側がL区）

(5) 整地層の確認

第1次確認調査のテストピットL区では、前述した瓦集中遺構の確認に加え「(前略)この遺構が構築される以前の状態は高師小僧の発達からわかるように、湿地であったことがたしかである。」と報告されている。またそれに続き「K区の黒褐色土の下部にみられたロームを混じえた黝黒色土層は、この湿地を埋立てて整地した際の堆積と考えることが可能である。」と記されている。そして台地と砂丘の間における湿地を埋立てあるいは整地して寺域の造成を行ったと推定された。また湿地は西北部分に設定したM・N区まで広がっていたと考えられている。L区とK区は第3次確認調査で調査地点を確認でき、指摘された堆積状況の再確認もできた。またM・N区は調査地点の再確認はできていないが、近接する第14次確認調査で堆積状況を把握することができている。岡本先生が指摘された湿地を示すこうした地形については、上記以外にも第5・7次確認調査でも確認できており、整地層の存在も明らか

にでき地形復元も進んでいる(図3)。40年前に僅かな調査面積で遺跡の立地を正確に把握されていることは卓見といえるであろう。

以上、再確認できた調査地点についてみてきたが、岡本先生が設定した調査地点の範囲で、七堂伽藍跡の主要建物や区画遺構などを捉えていることなどを考えると、調査区の設定方法や遺跡の捉え方は、今後遺跡把握を目的とした調査に対し大変参考となるものと思われる。

4 調査・公開への姿勢

最後に別な視点から岡本先生が行われた第1次確認調査を振り返ってみたい。

発掘調査の様子は、残された写真などで知ることができるが、前述したとおり調査には市民や大学生、市役所職員などが参加しているほか地元の県立茅ヶ崎北陵高等学校の生徒も参加している(写真9)。このように発掘調査実施に対し門戸を広げられていることは注目される。このことは岡本先生の発掘調査に

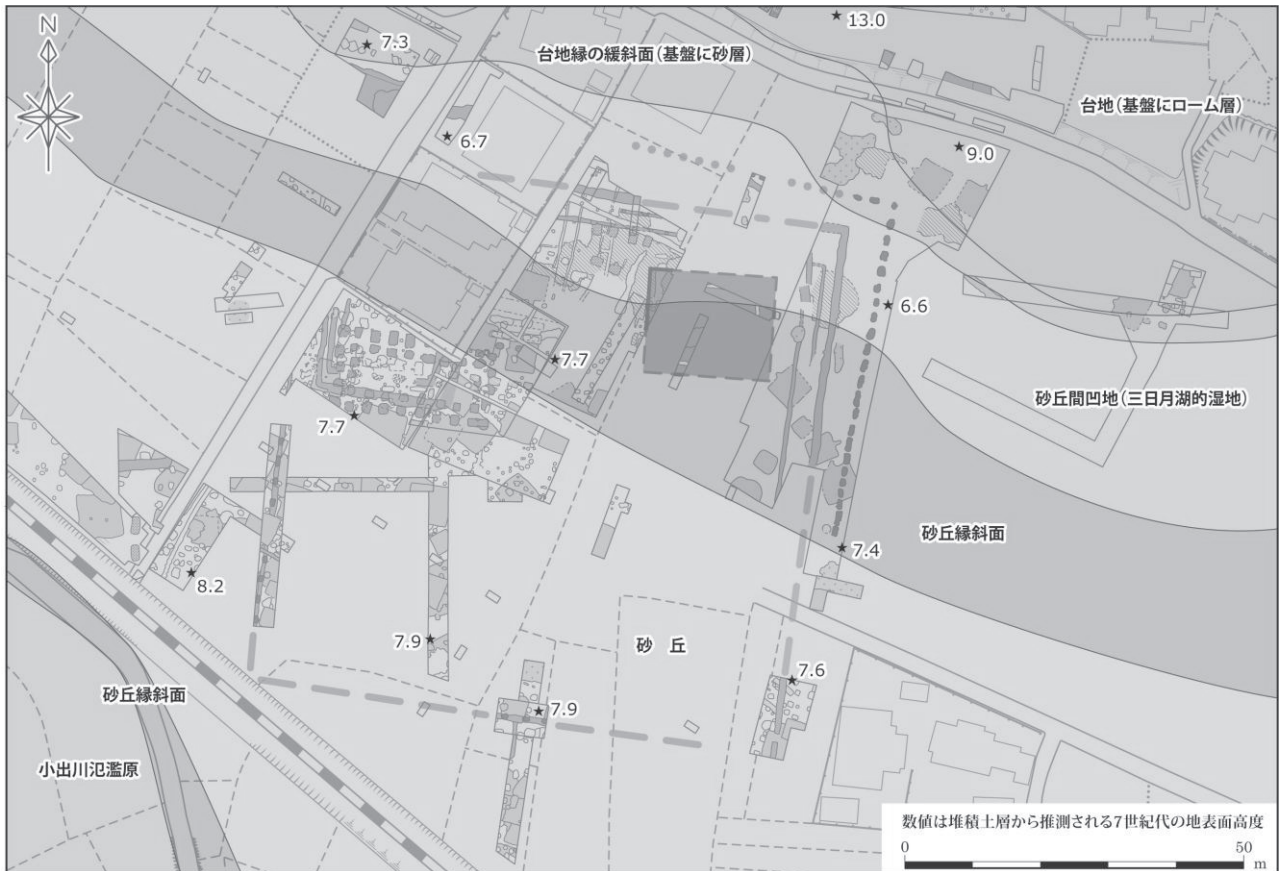


図3 七堂伽藍跡の地形復元分類図



写真9 第1次確認調査に参加した県立茅ヶ崎北陵高等学校の生徒

対する姿勢を反映したものかもしれない。また、北陵高校地内でその後高座郡家が発見され保存のきっかけとなるが、北陵高校と遺跡とのつながりは古くからあったと言えるかもしれない。

さらに建碑60周年を記念して企画された特別展「七堂伽藍跡碑～石碑に込めた想い～」の開催にあつて文化資料館所蔵の資料を確認したところ、第1次確認調査時に関わる写真が発見された(写真10)。写真はおおよそA4の大きさに厚紙に貼ってあり写真内容の説明は手書であるが、状況から展示用に作成されたものと推測でき、発掘調査後に調査成果に関する展示会を行っていたことが明らかになった。このことは岡本先生が発掘調査の成果を広くかつ早く知らせるために実施されたものと思われ、その姿勢は現在に通じるものである。

こうした調査方針や成果の公開に対する岡本先生の考え方は、その後茅ヶ崎市内で行われる発掘調査にも反映される。具体的には1980(昭和55)年から開始される新湘南国道建設にともなう調査の実施にあたって市民に参加を呼びかけられており、参加した人たちの中からその後の茅ヶ崎市における発掘調査作業の中心を担っていく人材が育っている。



写真10 文化資料館に保管されていた写真



写真 11 確認調査中の岡本先生

「わが町の文化財は、われわれの手で」という岡本先生の考えを反映したとするスローガンにもあるように(註 5)、40 年前の七堂伽藍跡の調査で実践されていた遺跡調査への姿勢や保存活用の考え方については学ぶものが多い。今後の七堂伽藍跡をはじめとする史跡・遺跡の調査研究や保存活用を進める際に必要な考えの一つとなるであろう。

七堂伽藍跡調査の後、岡本先生は茅ヶ崎市の文化財保護審議委員も務められ茅ヶ崎市の文化財保護に大きな影響を与えられた(写真 12)。

岡本先生は、報告の最後で次のように記されている。「(前略)古代寺院址の全貌があきらかにされるために、いつの日にか本格的な調査のおこなわれることを切に期待してやまない。その意味でも、蚕食的な破壊から遺跡を保護していく必要がある。」

幸い七堂伽藍跡はその後確認調査を行うことができ、中心部分が史跡となり保護・継承されていく



写真 12 文化資料館で講演される岡本先生(1979 年)

こととなったが、寺院の全貌を明らかにすることや保存整備には至っていない。あらためて 40 年前に行われた岡本先生の調査から、われわれは何を学び、何を伝えていくべきなのかを考えていく必要があると思われる。

小稿作成にあたっては、平山孝通氏にご協力を賜りました。また、図版作成には澤村奈穂子氏の手を煩わせました。記して感謝いたします。

註 1 岡本孝之ほか 1997『下寺尾寺院跡の研究』茅ヶ崎市文化財資料集 12 茅ヶ崎市教育委員会

註 2 報告では下寺尾遺跡とされているが、七堂伽藍跡を指すものと思われる。なお、その後刊行された『茅ヶ崎市史 3 考古・民俗編』の本文では下寺尾寺院址として記述されているが、遺跡一覧では遺跡名を「七堂伽藍」址とされている。

註 3 岡本勇 1978「七堂伽藍跡を掘る」『茅ヶ崎市史研究 3』茅ヶ崎市

註 4 岡本先生の報告では、23 日までとなっているが、その後下寺尾寺院跡研究会の資料整理によって、24 日までの記録が確認されている。おそらく日曜日までの予定で進められ、月曜日は残務として行われたのかもしれない。

註 5 10 周年記念集編集委員会 1990『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査 10 周年記念集』

* 茅ヶ崎市教育委員会社会教育課